



めじかじ
通信

No.155

小諸市古文書調査室 室長

市川包雄さん (62歳)

|| 佐久市 ||

ゆらさんの四季の菜膳

令和5年はお粥の年に



市川包雄さんは小諸市古文書調査室での仕事を始めて四年目になった。以前は長野県立歴史館への六年間の出向を挟んで、中学校3校小学校5校で教諭を務めていた。これまで『佐久町誌』『臼田町誌』『南相木村誌』に執筆したほか、信濃史学会や長野県文化財保護協会などに論文や報告を多数寄せている。著書には『菜の花 夕焼け 里の秋―唱歌・童謡のふるさと信州』（共著）がある。市川さんの小諸東中学校での教え子だった四十代男性は「村落史クラブで包雄先生と学校近く

の『田切地形』を見に行ったことを思い出す。教科書に書いてないことを教えてもらえて良かった」と話している。小諸市古文書調査室職員は二人。数人のボランティアの協力を得て行う活動は次の通り。古文書を中心に史資料を整理して目録を作成し、古文書解読講座を開き、小諸市が地域に向いて行っている「出前講座」でも依頼に応じて講師として歴史の話をする。市川室長は完了した目録をもとに年表を作成して、小諸史にしていく考えだ。古文書調査室では「古文書があつたら連絡を」となおも呼び掛けている。

小学生の頃から歴史好きだという市川さんが、古文書に興味を持ったのは高校生の時。家に伝わる『市川一族の定書』を見せられた。父は2番目に署名押印している五郎右衛門という人が直接の先祖だ、と教えてくれた。この時に市川さんは「この古文書を読む」と決意したという。信州大学に進学し古文書解読の研究室に所属して、卒論のテーマは「家訓」に決めた。他家の定め書きと比較して論文にした。解読した先祖の「掟」は論語の引用に始まり、質素倹約や一族の協力助け合いについて決められていた。なお、この『市川一族の定書』は大学で市川さんの指導教授だった森安彦先生も自著『古文書を読もう』の中に図版入りで紹介している。

古文書解読に必携とされるのは『くずし字辞典』だ。市川さんは大学で使い始めた辞典を使い倒し、2冊目も小口がきれいに外側に開いてすっかり手になじんでいる。自分の「当たりを付けた読み」が間違っていないか辞典で確認を怠らない。「判読に苦労する

るのは人名。文の前後から判断することができない。江戸期は寺子屋などで正式に学んでいたが、明治以降は自己流のくずし字を書く人が増えている」と話す。前室長の斎藤洋一さんから引き継いでいる仕事のほか、現室長は統廃合が進むと消えていく校歌についても考察をしたい。定説になつていない小説家でルポライター故井出孫六氏の「戌の満水が八月朔日墓参の起源ではないか」という考えには、さらに論考を進めたい。そして在任中に調査室の後継者を見つけなければならぬ。

中込市川家十五代目当主としての市川包雄さんは、公務に追われて保存袋に入れたままにしている自家に伝わる文書の整理が急務だ。さらに土蔵の整理をし、家族が暮らすだけには広すぎる邸内を公開し、地元工芸作家展示場兼カフェ付きの資料館も作りた

い。市川さんは忙しい。（取材・文 佐藤万千子）

今年こそもつとお粥と仲良く、年が明けての七草がゆ。正月のご馳走三昧で疲れた胃を休ませようという、昔の人の知恵です。中国をはじめ東南アジアでは朝食におかゆは定番ですが、日本ではおかゆ好きが少ない気がします。病気になつたときのイメージがあるからでしょうか。薬膳では粥を「しゅう」と読み、消化しやすく、年齢や民族にかかわらず適用できるとしています。

また少ない量のお米でできるため、今流行りの糖質制限にもなります。今回は風邪の初期に食べたい「春菊と菊の花のおかゆ」を紹介します。私の先輩でもある料理研究家・村岡奈弥さんのレシピです。米½合を水1ℓ、オリブオイル小さじ3を加え沸騰後弱火で約40分炊きます。最後に春菊を加えて塩で味を整えたら、器に盛り菊の花をたっぷりおのせます。春菊は気の巡りをよくし、咳も抑える効果も。

おかゆは胃腸を整える働きがあるので、一年の計で今年からは「朝はおかゆ！」健康法というのはいかがでしょうか。（国際中医薬膳師 小清水由良）

（取材・文 佐藤万千子）



は高校生の頃から歴史好きだという市川さんが、古文書に興味を持ったのは高校生の時。家に伝わる『市川一族の定書』を見せられた。父は2番目に署名押印している五郎右衛門という人が直接の先祖だ、と教えてくれた。この時に市川さんは「この古文書を読む」と決意したという。信州大学に進学し古文書解読の研究室に所属して、卒論のテーマは「家訓」に決めた。他家の定め書きと比較して論文にした。解読した先祖の「掟」は論語の引用に始まり、質素倹約や一族の協力助け合いについて決められていた。なお、この『市川一族の定書』は大学で市川さんの指導教授だった森安彦先生も自著『古文書を読もう』の中に図版入りで紹介している。

古文書解読に必携とされるのは『くずし字辞典』だ。市川さんは大学で使い始めた辞典を使い倒し、2冊目も小口がきれいに外側に開いてすっかり手になじんでいる。自分の「当たりを付けた読み」が間違っていないか辞典で確認を怠らない。「判読に苦労する

るのは人名。文の前後から判断することができない。江戸期は寺子屋などで正式に学んでいたが、明治以降は自己流のくずし字を書く人が増えている」と話す。前室長の斎藤洋一さんから引き継いでいる仕事のほか、現室長は統廃合が進むと消えていく校歌についても考察をしたい。定説になつていない小説家でルポライター故井出孫六氏の「戌の満水が八月朔日墓参の起源ではないか」という考えには、さらに論考を進めたい。そして在任中に調査室の後継者を見つけなければならぬ。

今年こそもつとお粥と仲良く、年が明けての七草がゆ。正月のご馳走三昧で疲れた胃を休ませようという、昔の人の知恵です。中国をはじめ東南アジアでは朝食におかゆは定番ですが、日本ではおかゆ好きが少ない気がします。病気になつたときのイメージがあるからでしょうか。薬膳では粥を「しゅう」と読み、消化しやすく、年齢や民族にかかわらず適用できるとしています。